

詞の場合は「主」である。神意を示す意では「示」である。二字の分化はほぼ戦國期に完成した。「禾・年」は、稻などの作物を表す字が、收穫・みのりの意にも使われ、聲符「人」を追加して區別した。「帚・婦」は、帚を象った字形であり、掃除する意と、婦人の意の二語を表す。また「歸(とつぐ)」という語も表す。「畢・禽」の卜辭は、狩獵用の網を象る。その名詞の場合に、田獵の意の「田」が加えられた字形が「畢」であり、後に「終わる・盡す」の意に假借された。聲符の「今」が加わったのが「禽」字で、字形の下部は訛變した。獲物を捕らえる意の動詞であり、また狩りの獲物となる動物・鳥類の意にもなる。

結論として、轉注とは、

A語を記録する表意字を轉じてB語を記録する表意字とすることである。轉注は假借と同じく、どちらも元からある字形の利用であるが、原字が假借されると、字音は變わらずただ字義だけが變わり、閱讀する時には何の意味で使っているのかを文脈から判定せねばならない。原字が轉注されると、字の音と義とがどちらも變わる。故に閱讀する時にはその音と義とを共に文脈から定めないとけない。

そうしてこのような「一形多讀」の字の不確定性を克服するために、原字と轉注字を分化させる方法として、氏は、「異體・點畫の追加・意符の追加・聲符の追加」が利用されたと述べる。

氏は最後に、古代の文字學者は一字多義を引伸と言ったが、假借義は引伸義と別でありさらに轉注義があると結ぶ。

(村上幸造)

「豊豊辨」／「豊豊再辨」

漢代の隸書にあって、字形が似ているところから、混交して使用されるに至った豊豊の二字の區別を説く「豊豊辨」(『古文字研究』第一二輯、一九八六年)、並びに「豊豊再辨」(『古文字研究』第三二輯、二〇一八年)である(何れも『林漢文集・文字卷』に所収)。論者の林漢は、漢代の隸書の例をあげて、以下のように問題提起をする。

豊豊二字の字音と字義は大いに異なっているが、字形が近いため、漢隸では二つが互いに混じりあう例がある。華山廟碑では「禮祀は豊かに備わる」の、豊を豊に作り、孔宙碑でも「豊年多黍」の豊を豊に作る。一方で、桐柏廟碑の「處正好禮」の禮は禮に作り、孔和碑でも「廟有禮器」の禮は禮に作る。同じ書き手によって言えば、夏承碑の「進退以禮」の禮は禮に作り、「名豊其爵」の豊は豊に作って、豊豊の上部に差異がある。しかし史晨奏銘の「以祈豊穰」の豊は豊に作って、夏承碑の禮字の豊に従う書法とまた完全に一致する。『佩觿』に「蔡中郎は豊を豊と同じとする」と云うのは、漢代の有名な學者が豊豊を弁別しなかった明らかな証拠となる。

さらに、劉心源が『奇觚室吉金文述』において、両字が篆書にあっても區別なく使用されていることを言い表して以来、古文字學家の多くがその説に従っていることを挙げ、それらをふまえて、豊豊の二字の字源が異なることを説き進めている。

まず『說文解字』の豊(豊)は、卷五・豊部にあつて、「行禮の器。豆に従う、象形。凡て豊の屬は皆な豊に従う。讀みは禮と同じ。盧啓

〔hyo-kei〕の切」とあることを言い、続いて豊〔豊〕は、卷五・豊部にあつて「豆の豊満なもの。豆に従う、象形。敷戎〔hu—yu〕の切」とあることを示した後、許慎の説は誤つており、両字ともに「豆に従う」のではなく、「亶に従う」字であると言う。ただ、許慎は両字が「豆に従う」と言うものの、両字を明確に區別していることを擧げ、これを端緒として、両字の起源が異なることが確かめられると言

う。甲骨・金文中には、「珏に従い、亶に従う」豊〔豊〕字〔豊〕が見えると論者は言う。甲骨文の「亶」の上には兩串の「玉」を盛る。亶は樂器、玉は祭儀に獻薦する玉帛である。「豊」字の下部は亶（鼓）、上部は薦玉の象形。全体は亶（鼓）に玉を盛る象形であつて、行禮敬神を示す。これにより、「豊」は奉玉を盛んにして神祇に事え奉ずる器を言う。しかしながら、金文では、豊邢叔簋〔集成〕〇三九二二三（西周晚期）の豊は、豊〔豊〕に作り、下部の亶は『説文解字』の豊〔豊〕に似かよつた字形に変化して、豆の字と誤解されるようになった。しかし、二字の根本的な區別は豊字が珏に従い、豊字が丰丰に従うといふことであるとして、論が展開される。

豊〔豊〕の上部の丰は、『説文解字』卷六・生部に「艸の盛んなること丰丰たり。生に従う、上下達する。敷容〔hu—yo〕の切」とあつて、「珏に従い、亶に従う」豊〔豊〕字とはっきりと區別できる。豊字の上部は声符の幷であり、「丰丰然」とした鼓の音色を言う。甲骨文の敷（豊）の左上は鼓の飾り、中は鼓面、下は鼓架の象形。右上は飾り物のある鼓槌、下は又（手）に従う。西周鐘銘の常用語に言う「敷

々簋々」、(鉄鐘では「簋々敷々」三年撫鐘では「豊々簋々」)の豊字は豊、豊に作る。顯然かに幷に従い、豊が珏に従うのとは同じでない。鉄鐘は豊、新出の安鐘は豊、傳世の安鐘は豊に作り、幷に従うことは疑いない。駉狄鐘の豊、士父鐘の豊、號叔旅鐘の豊は、幷に従うものが訛變している。また、號叔旅鐘〔集成二四四〕のうちの一器の敷字は豊に作る。卜辭中の亶と鼓が通用する例からみれば、豊と豊は同一字の簡繁二體と思われる。幷に従うのは、擊鼓の聲が蓬蓬然たるを言い、丰を聲符とする。宏大な鼓聲の充盈することから、引申して「大いに、満つる」等の字義が生まれ、丰から聲を得たものの、遂には丰に代わつて、「繁茂する」字義の專用字となつた可能性がある。このように豊字の音義は豊字とは何のかかわりもない。

以上述べるところ、豊、豊の二字が均しく亶に従うとはいへ、豊が珏に従い、豊が幷に従うのは、すでに先秦時代の古文字に確証があり、豊は會意字、豊は形声字である。豊、豊の二字の字形、字音、字義の明確な區別を顧みず、二字を混交させて一字とするのは正しくないと結論付けている。

「豊豊再辨」は「豊豊辨」発表後（一九八六年）の反論に答え、自説を再論する論文である。ただ、所論は、裘錫圭が

「豊〔豊〕」は、「亶」の上に「兩串の玉（珏）」を盛る大鼓であり、大鐘の「庸」と連記される大きな樂器の名称である。

とする説〔裘錫圭「甲骨文中の幾種樂器名稱 釋庸、豊、軹」、『中華文史論叢』一九八〇年第二輯〕を「豊豊辨」の自説によって、批判することから始めている。

また、裘錫圭の説を受け継ぐ李宗煜が「豊豊辨」の説くところを批判し（李宗煜「從豊豊同形談商代的新酒與陳釀」、『出土材料與新視野』台北中研院二〇一三年）、「一形多用」の立場から、

豊（豊）は、玉を飾った大鼓で、鼓聲が宏大で充盈するところから引申して大、滿の字義が生まれ、遂には豊かとなる。鐘鼓は本来禮樂用の樂器であったものが、遂には鼓の形から禮が想起されるようになる。實物が豊滿や禮節を表示するわけである。

という所説は表意的であると批判して、自説を確かめている。

（笠川直樹）

長子口墓不是微子墓

本論文は、「長子口」銘を持つ青銅器が多数出土した西周代の古墓について、文献に見える「微子」の墓ではないことを論じた短編である。なお、本論文には拓本が掲載されていないので、次図は『近出殷周金文集録二編』二〇一を引用した。



当該の大墓は、河南省鹿邑県で一九九七年に発見されたもので、墓主は六〇歳前後の男性と推定されている。また三五件の「長子口」銘の青銅器、および三件の「子口」銘の青銅器が出土した。

当初の発掘簡報では、殷墟甲骨文に見える「長子」を「長国の諸侯」とし、「長子口」の祖父であるとした。さらに、その後の発掘報告では「長子口」を「長を氏とする」としている。そして、そのほかの「長子」あるいは「長由」の銘をもつ青銅器も「長氏」のものとし、「長氏」が西周前半期まで存在したとした。

一方、二〇〇二年には王恩田が「長子口」を文献資料に見える「微子啓」あるいはその弟の「微仲衍」とした（筆者注・微子啓は宋の初代諸侯、微仲衍は第二代）。

同年、日本で松丸道雄がこれに同調し、「長子口」を「微子啓」とする文章を朝日新聞に発表した。論拠としたのは、1. 「長」字は訛誤で「微」字になりうる、2. 『呂氏春秋』誠廉で微子が「世為長侯、守殷常祀」だったとするのが「長国の侯」と解釈できる、3. 「口」が上古音で「啓」と同紐と解釈できるという三点である。つまり、本来は「長子口」だったのが訛誤や通用により「微子啓」になったとするのである。

本論文の著者である林澧は、年賀状で松丸道雄に対していくつかの反論をしたという。林澧は個人的な討論としていたのだが、二〇〇四年に常耀華が松丸道雄の主張を『中国文物報』に中国語訳して掲載し、さらに高西省も同誌において「長子口」を「微子啓」とする文章を発表したため、あらためて正式に自身の見解を発表したという経緯である（筆者注・本論文の執筆は二〇〇四年だが公刊は二〇〇五年）。

林澧は、以下の三点を反論として挙げている。
一点目は字形である。王恩田は、字形の上部を区別せず、杖を持つ